

柳州の城楼に登る (柳宗元)

(柳州の城楼に登り漳・汀・封・連四州の刺史に寄す)

城上の高樓 大荒に接す

海天の愁思 正に茫茫

驚風乱れ 颭かす 芙蓉の水

密雨斜めに 侵す 薜荔の牆

嶺樹重なつて 千里の目を遮り

江流曲つて 九廻の腸に似たり

共に来る 百粵文身の地

猶お自ら 音書一郷に滯る

城上高樓接大荒 海天愁思正茫茫
驚風亂颭芙蓉水 密雨斜侵薜荔牆
嶺樹重遮千里目 江流曲似九廻腸
共來百粵文身地 猶自音書滯一郷

解説 作者が柳州の城楼に登り、四方の景色を見て感傷に堪えずして作つたもの。

語釈 ※大荒 世界の果て。※海天 海と空と。※茫茫 ひろびろとして果てしないさま。※驚風 げげしい風。※颭 風が物を吹き動かすこと。※芙蓉水 はずの花の咲いている池の水。※密雨 すぎ間なく降りこめる雨。※薜荔 草。和名はまさきのみずら。※千里目 ずうつと遠くの方まで見渡す目。※九廻腸 悲しみもだえるあまり腸が一日に九回もよじれること。※百粵 粵は越に同じ。越には多くの未開種族がいたので百越といった。※文身 入れ墨。※音書 手紙。

通釈 この城壁の高殿は、世界の果てにまで連なっているようであり、海も空も、そして、私の愁思も果てしなく広がる。折りから吹く激しい風は、はずの花の咲いている池の水を波立たせ、降りこめる雨足は、斜めにまさきのかずらのこの榎根にたたきつける。峰の木々は幾重にも重なって、千里の彼方を望む私の目を遮り、川の流れば曲り曲つていて、悲しみのあまり一日に九回もよじれる愁人の腸のようである。我々五人はともに入れ墨の蛮族のいる越の国に来て、交わりたい手紙までそれぞれの住む一地方にとどこおっているため、意を通ずることが出来ないでいる。